

神奈川県発掘調査成果資料

2020

◆内 容

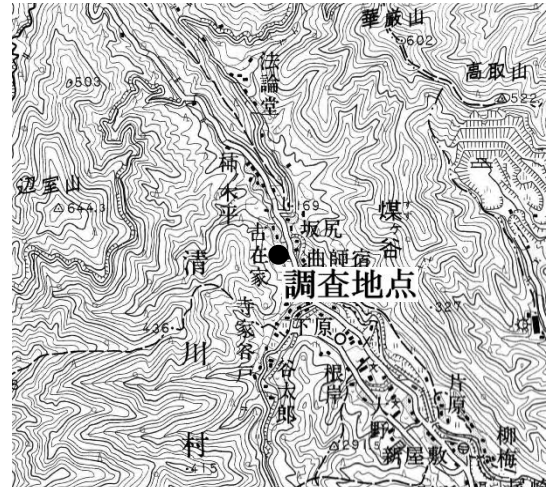
- 「**煤ヶ谷古在家遺跡第3地点**」(清川村) — 1
秋山 重美 (株式会社玉川文化財研究所)
- 「**山王 B 遺跡第14地点**」(平塚市) — 5
西野 吉論 (株式会社玉川文化財研究所)
- 「**七ノ城遺跡第10地点**」(平塚市) — 9
太田 雅晃 (株式会社玉川文化財研究所)
- 「**河原口坊中遺跡第8次調査**」(海老名市) — 13
市川 正史 (株式会社アーク・フィールドワークシステム)

神奈川県教育委員会教育局 生涯学習部文化遺産課

中村町駐在事務所 (神奈川県埋蔵文化財センター)

すすがやこざいけ
煤ヶ谷古在家遺跡第3地点

所在地 清川村煤ヶ谷字古在家2707番4外
調査期間 令和2年1月7日～令和2年5月29日
調査面積 約360㎡
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 秋山重美・香川達郎
調査概要 神奈川県厚木土木事務所による県道64号（伊勢原津久井）古在家バイパス道路の改良工事に伴う事前調査として実施しました。この第3地点の調査では、近世以降、中世、縄文の各時代の遺構と遺物を発見しました。



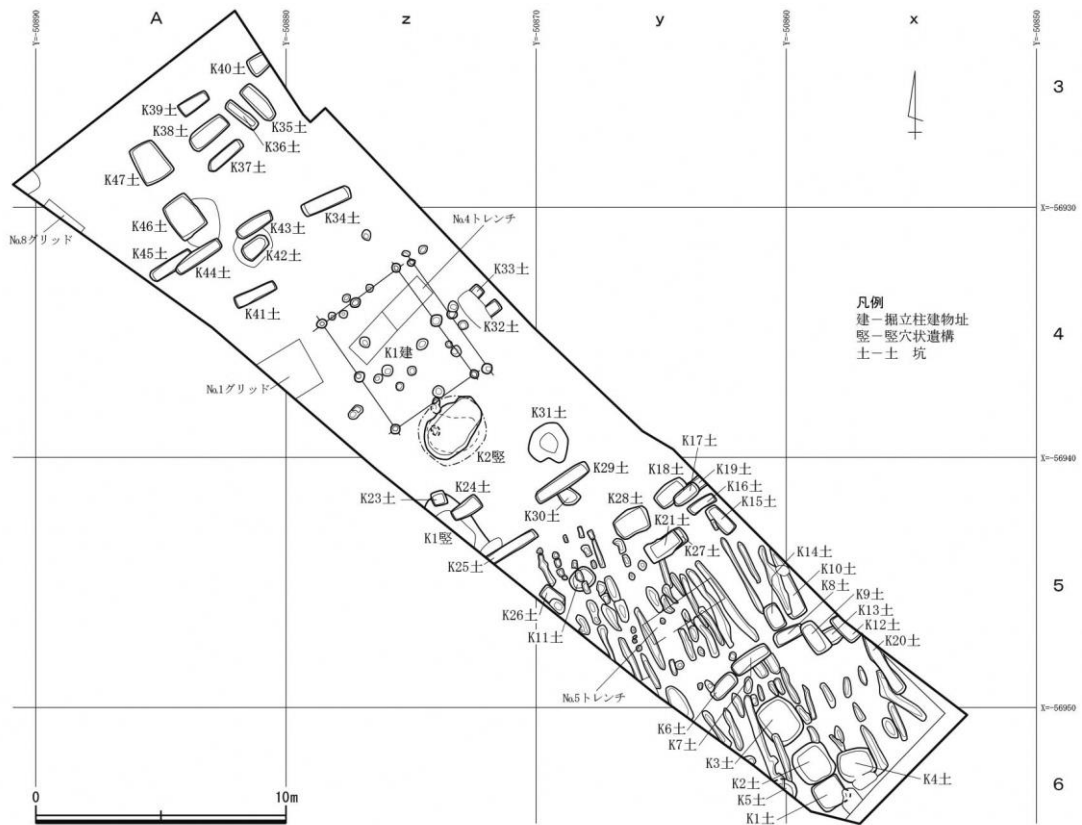
第1図 遺跡位置図（1/50,000）

近世以降では、竪穴状遺構2基、掘立柱建物址1棟、道状遺構2条、土坑44基のほか、畝状遺構やピットなどを検出しました。竪穴状遺構・掘立柱建物址・ピットの分布は調査区中央付近に、畝状遺構は調査区南東側に、土坑は調査区の南東側と北西側の2箇所集中し、道状遺構は調査区のほぼ中央部を縦断していました。出土遺物は十数点の陶磁器・石製品・金属製品という僅少な内容ですが、金属製品のうち銭貨1点と角釘1点については比較的良好な遺存状態でした。これらの大半は遺構外からの出土であるため検出した遺構のほとんどが時期の特定に至っていませんが、遺構間の重複関係より判断すると、最初に道状遺構がつけられ、廃絶後に竪穴状遺構、掘立柱建物址、土坑、畝状遺構などに変わったものと考えられます。

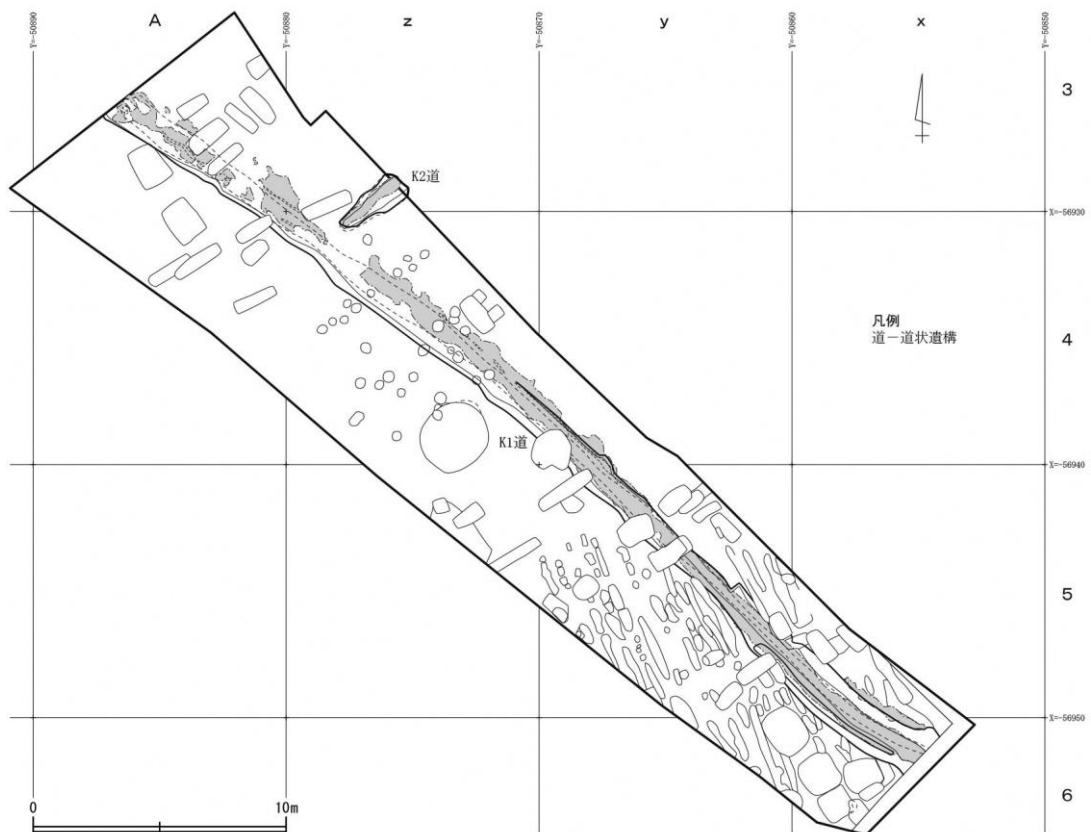
中世の検出遺構は、土坑36基、溝状遺構1条、性格不明遺構（^{じぎょう}地業面）、ピットなどです。遺構の分布は調査区の北西側と南東側に大きく分割でき、特に北西側での遺構密度は顕著となります。北西側に土坑・溝状遺構・性格不明遺構・ピット、遺構がやや希薄な南東側は土坑とピットです。遺構間の重複関係からは、土坑が溝状遺構よりも新しく、ピットが土坑よりも新しいことが確認されました。出土遺物は数点の陶磁器という僅少な内容ですが、ほぼ遺構外からの出土であるため時期の特定までには至っていません。

縄文時代の検出遺構は、陥し穴が11基です。遺構の分布はやや散漫ですが、調査区のほぼ全域に及びます。密度をみると北西端部寄り、中央部付近、南西端部寄りの3箇所に小さな集中が見られます。出土遺物は少量ですが、陥し穴から縄文土器の細片、包含層から縄文時代早期以降の土器片が出土しています。

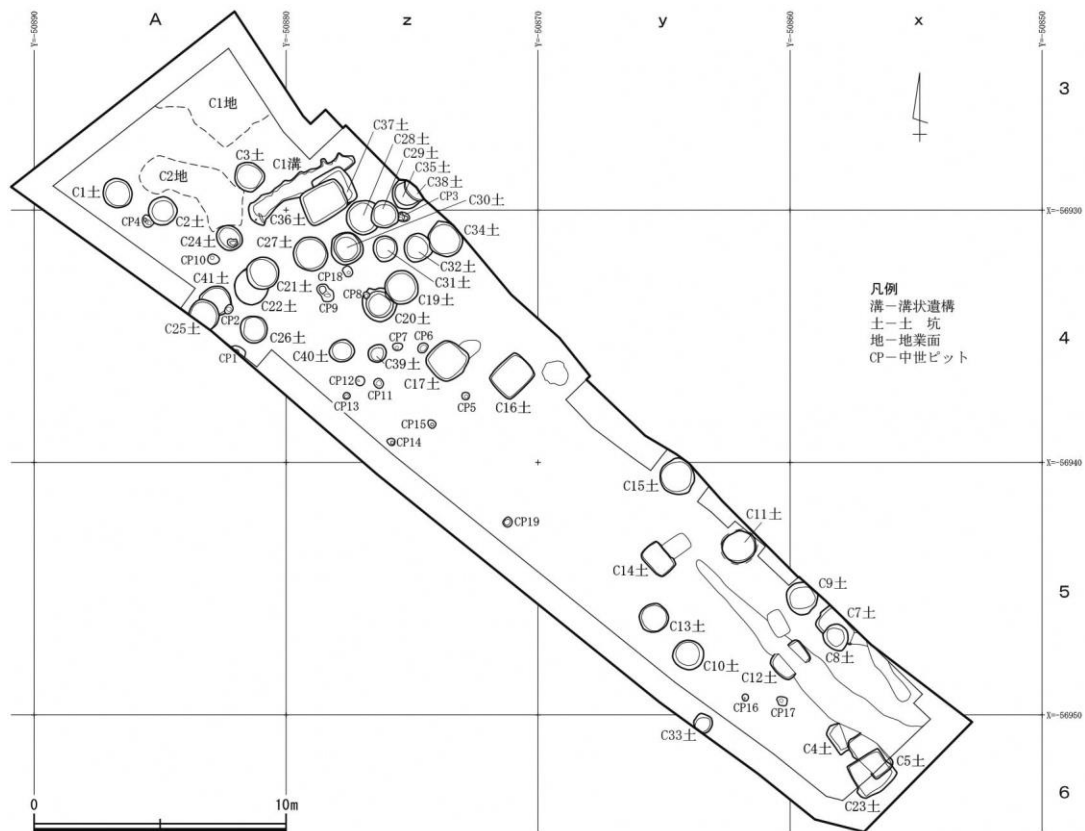
まとめ 第3地点の調査では、上述したような時代の遺構と遺物が発見されました。その結果、近世以降では小規模な建物を伴う居住域と生産域、これらがつくられる前には道状遺構があり、中世では生産域、縄文時代では狩猟場として利用されていたものと考えられます。これらは本遺跡第1・2地点での調査成果を補完する内容となり、出土遺物については各時代とも少量でしたが、数多くの遺構が予想以上の密度で本地点に存在していたことが判明しました。（秋山重美）



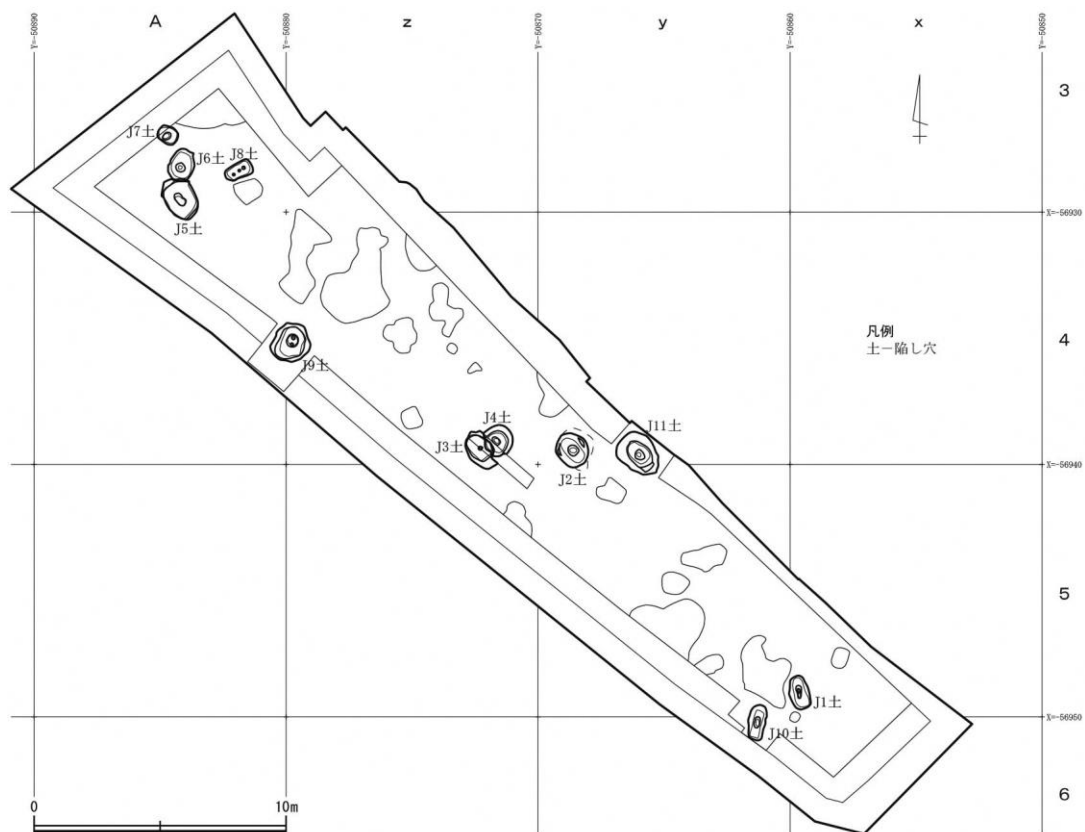
第2図 近世以降（第1面）遺構分布図（1/300）



第3図 近世以降（第2面）遺構分布図（1/300）



第4図 中世遺構分布図 (1/300)



第5図 縄文時代遺構分布図 (1/300)



写真1 遺跡遠景（南東上空から）



写真2 近世以降（第1・2面）全景（北東上空から）

国府推定域内で土地利用の一端が明らかに

さんのう

山王B遺跡第14地点

所在地 平塚市西真土一丁目1507番1Bの一部

調査期間 令和2年4月6日～5月27日

調査面積 199㎡

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 西野吉論・麻生順司

調査概要 山王B遺跡第14地点の調査は、湘南新道建設に伴う事前調査として行われました。

調査地点は平塚市域の南東部、JR東海道線平塚駅から北へ約3kmに位置しています。また、

平塚市域の中央から東部にかけて広がる沖積地には12列の砂丘があり、調査地点は、そのうち北から2列目の砂丘南側の堤間凹地と、3列目の砂丘との間に広がる砂州上に立地しています。そのため、調査区内は南から北に下がる傾斜地形となっています（写真3）。

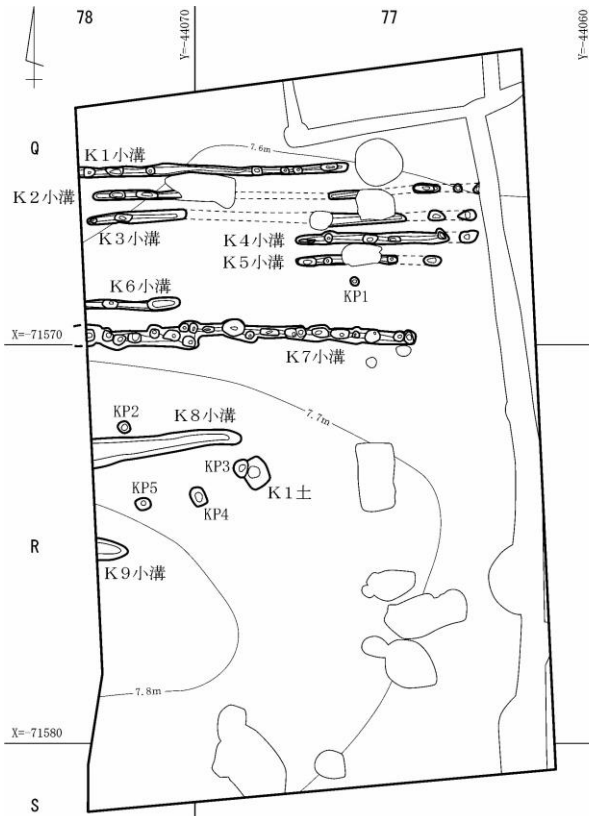
今回の調査で発見された遺構は、近世が小溝9条、土坑1基、ピット5基、中世が溝状遺構3条、土坑11基、ピット18基、奈良・平安時代が竪穴状遺構2基、溝状遺構5条、土坑11基、ピット28基、古墳時代後期～奈良時代が溝状遺構1条、土坑14基、ピット16基です（第2図）。調査成果の一つは、中世の段階に斜面から凹地へと地形が大きく変化すると考えられる位置に掘られたC1号溝状遺構です（写真1）。規模が大きく直線的であることから、土地の区画を目的としていると思われます（第4図）。C1号溝状遺構と、やや古い9世紀～10世紀前半に用いられたと考えられるH1号溝状遺構（第5図、写真2）とは、ほぼ直交しています。C1号溝状遺構の詳細な時期は不明ですが、ともに区画のために掘られた溝ではないかと思われます。

遺物は、近世の陶磁器片が5点、古墳時代後期～平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器が遺物収納箱で2箱弱とわずかな量しか出土しませんでした。今回の調査地点は東西両隣の第13地点に比べて遺構が少なく、竪穴住居や掘立柱建物といった居住を示す遺構も見つかっていないことから、集落の空隙地となっていたと考えられます。

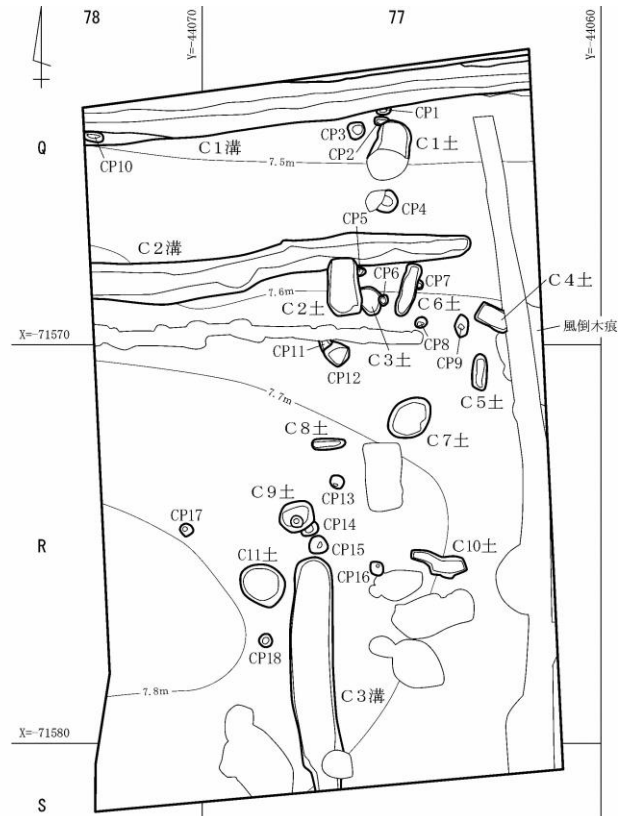
まとめ 平塚市内の砂州・砂丘・堤間凹地の発掘調査の成果から、奈良・平安時代の砂丘上には居住域、凹地には生産域が展開し、斜面地では遺構が希薄になることが分かってきています。本調査地点においても遺構の希薄な状況が確認されました。（西野吉論）



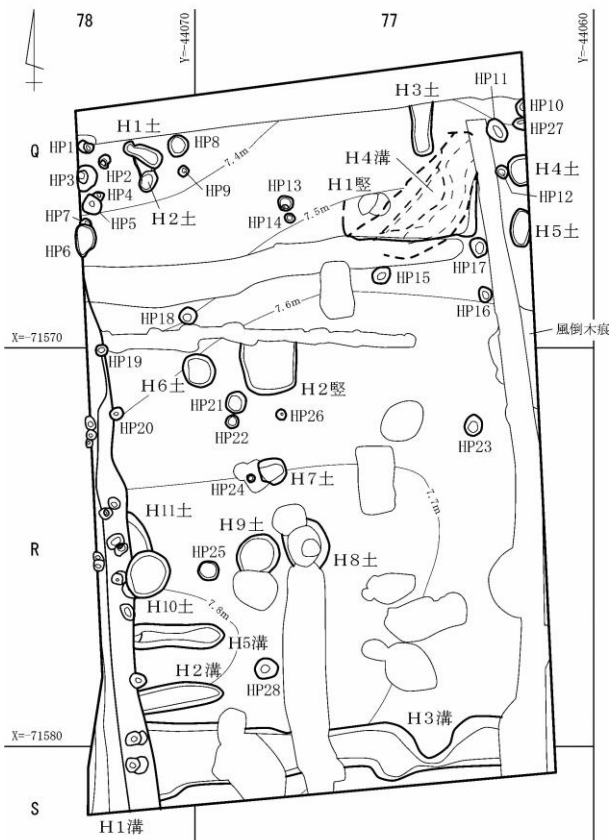
第1図 遺跡位置図（1/50,000）



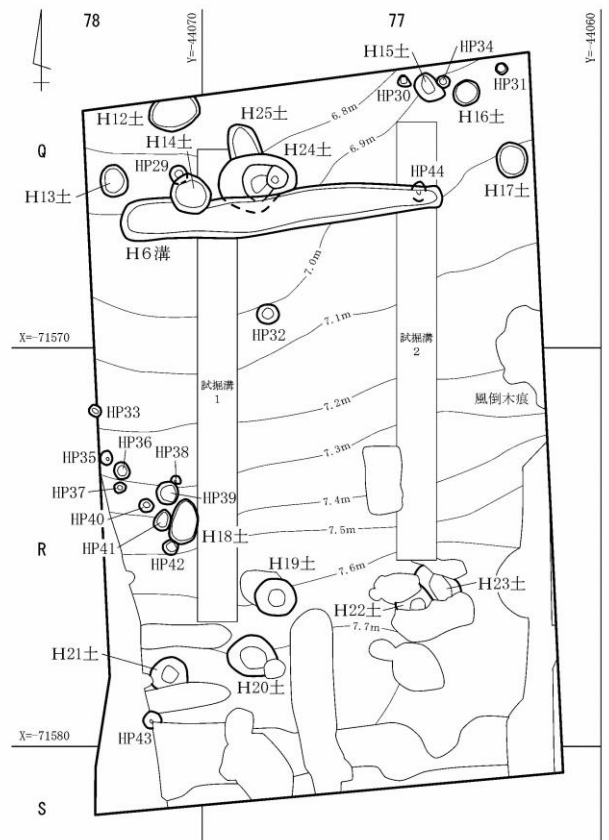
第1面 近世遺構分布図 [S=1/200]



第2面 中世遺構分布図 [S=1/200]

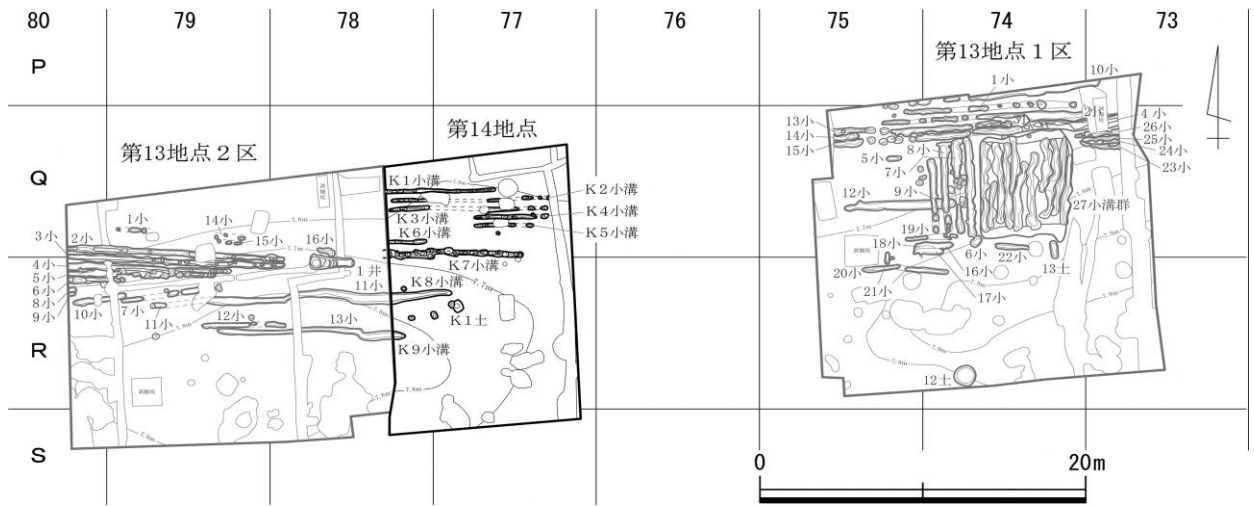


第3面 奈良・平安時代遺構分布図 [S=1/200]

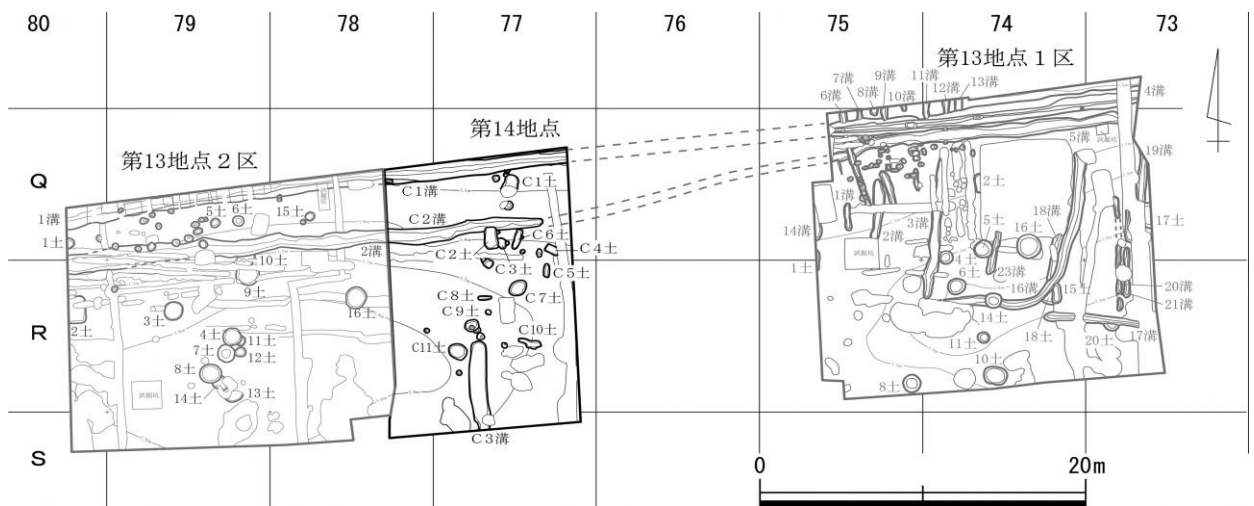


第4面 古墳時代遺構分布図 [S=1/200]

第2図 山王B遺跡第14地点 第1~4面遺構分布図 (S=1/200)



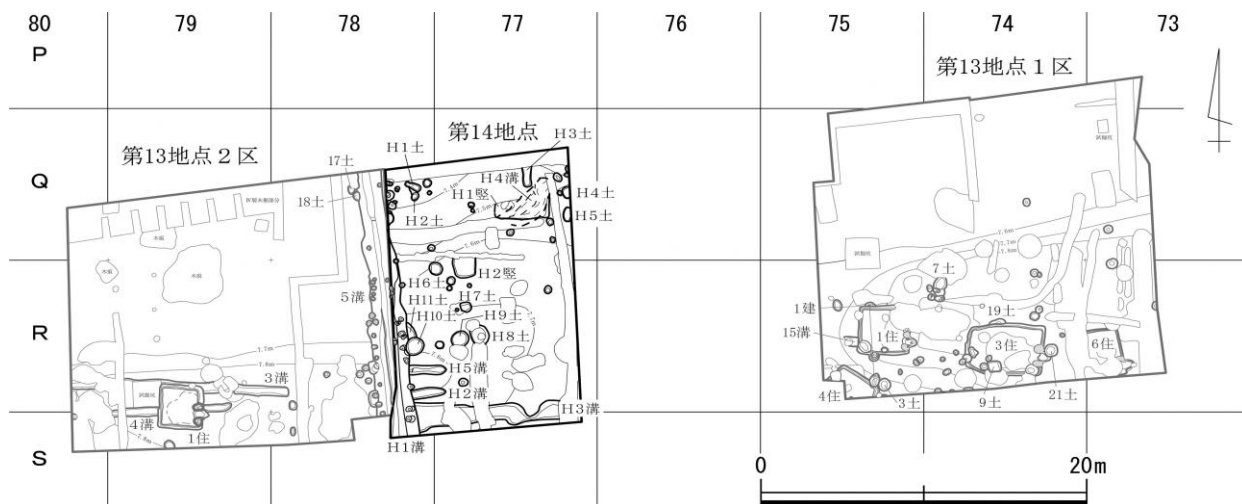
第3図 山王B遺跡第13・14地点 近世遺構分布図 (S=1/500)



第4図 山王B遺跡第13・14地点 中世遺構分布図 (S=1/500)



写真1 C1・2号溝状遺構 (西から)



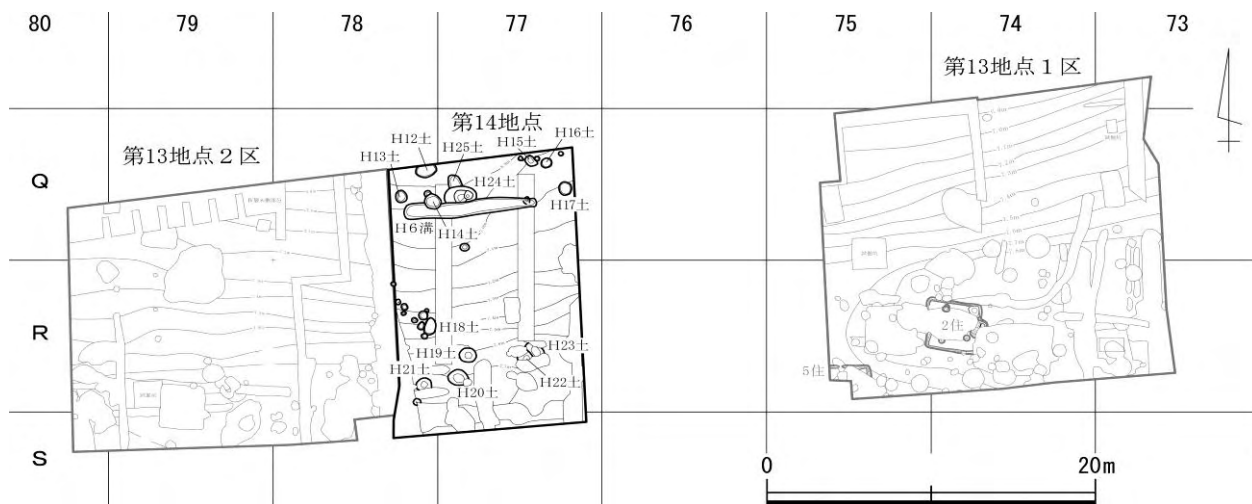
第5図 山王B遺跡第13・14地点 奈良・平安時代遺構分布図 (S=1/500)



写真2 H1号溝状遺構(北から)



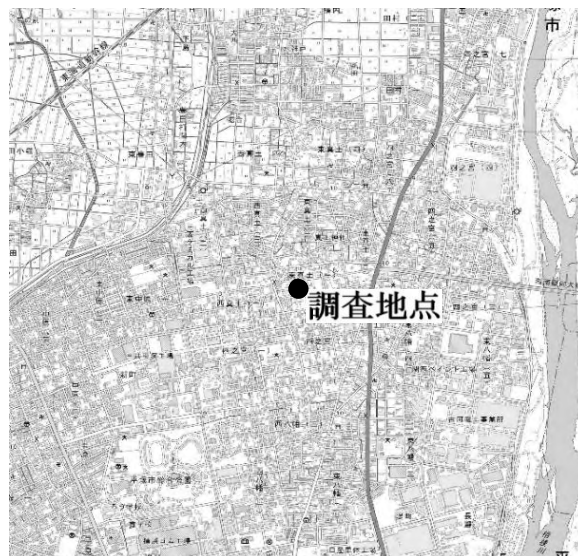
写真3 第4面 傾斜の状況(南西から)



第6図 山王B遺跡第13・14地点 古墳時代後期～奈良時代遺構分布図 (S=1/500)

ななのいき
七ノ域遺跡第10地点

所在地 平塚市東真土一丁目地内
調査期間 令和元年7月22日～令和2年6月8日
調査面積 1,268㎡
調査組織 株式会社玉川文化財研究所
担当者 太田雅晃・御代七重
調査概要 今回の調査は、湘南新道建設に伴う事前調査として実施しました。遺跡は平塚市域に広がる砂丘列（第3列）の上に立地しており、東および南方向に緩やかに下る斜面地の上で、古墳時代後期～奈良・平安、中世、近世の遺構群を検出しました。以下検出面ごとにまとめて説明します。



第1面（平安時代～近世） 近世の畝状遺構14群・

第1図 遺跡位置図(1/50,000)

溝5条・土坑4基・ピット48基、中世の土坑2基・ピット5基、平安時代の竪穴状遺構1基・土坑75基・ピット106基を検出しました。主な遺構は、調査区の西および北側を中心に分布する大形の円形土坑群（平安時代～中世）で、いずれも第2面の竪穴住居址を壊して構築されています。

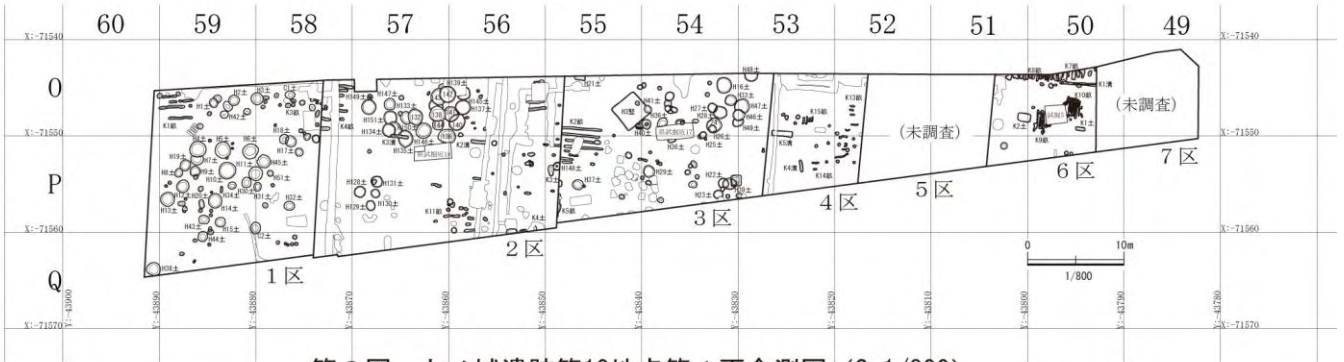
第2面（平安時代） 竪穴住居址36軒・竪穴状遺構7基・掘立柱建物址3棟・井戸1基・溝9条・土坑110基・ピット188基を検出しました。竪穴住居址の年代は8世紀末～10世紀前葉で、9世紀代のものが最も多く、本遺跡の中心的な時期となっています。主な遺構は、カマドの部材に土師器甕を使用したH12号住居址や、鉄製の^{のみ}鑿が出土したH1号井戸などが挙げられます。

第3面（古墳時代後期～奈良時代） 竪穴住居址9軒・竪穴状遺構4基・掘立柱建物址4棟・井戸4基・溝4条・土坑49基・ピット124基を検出しました。主な遺構は南北3～4間×東西2間のH4号掘立柱建物址、7世紀中葉～後半の土器がまとまって出土したH3号井戸が挙げられます。

第4面（古墳時代後期以前） 溝2条・土坑15基・たまり状遺構1基・ピット31基を検出しました。地山の砂層に構築された遺構群ですが、遺物も少なく詳細は不明です。

まとめ 今回の調査では4面にわたる遺構群を検出し、なかでも第2面の奈良・平安時代においては竪穴住居址36軒を検出するなど、活発な集落活動を確認できました。また、前後の時代には井戸や円形土坑なども多く検出しており、集落だけではなく耕作地としての土地利用のあり方も確認できました。（太田雅晃）

【第1面】平安時代～近世



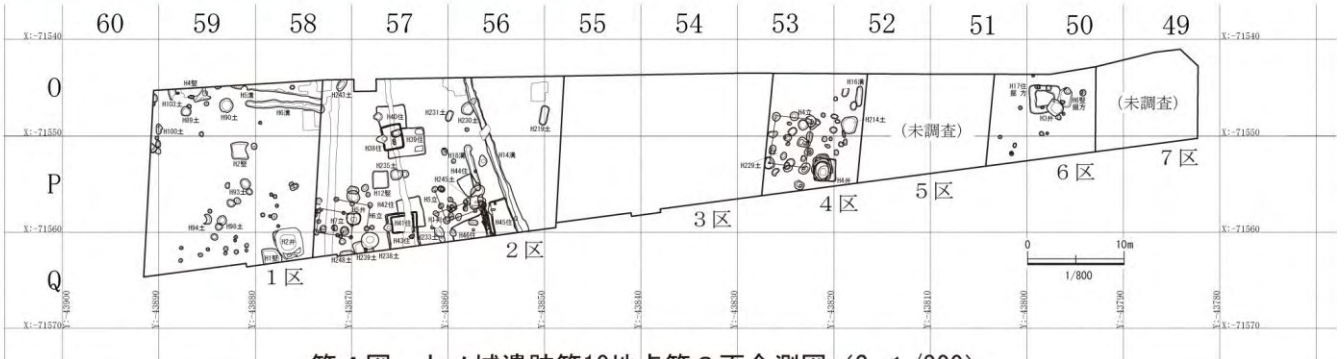
第2図 七ノ域遺跡第10地点第1面全測図 (S=1/800)

【第2面】平安時代



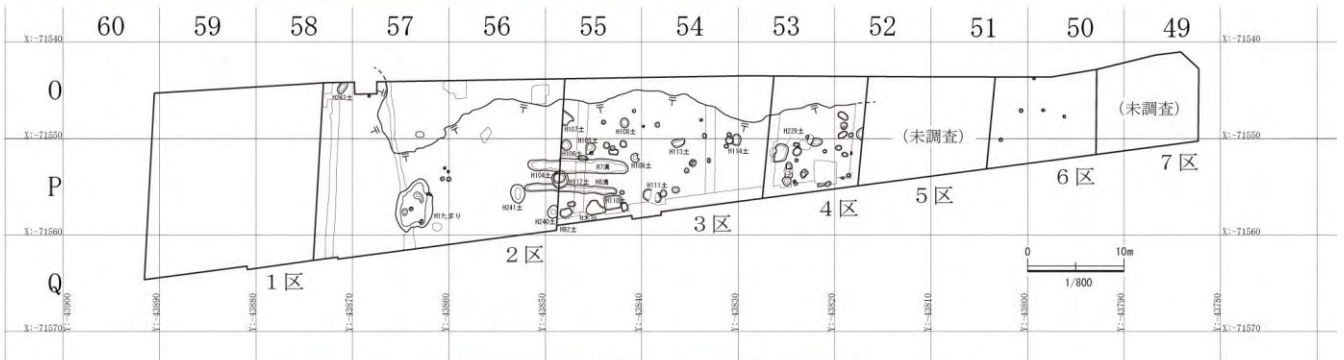
第3図 七ノ域遺跡第10地点第2面全測図 (S= 1 / 800)

【第3面】古墳時代後期～奈良時代



第4図 七ノ域遺跡第10地点第3面全測図 (S= 1 / 800)

【第4面】古墳時代後期以前 (※古墳時代後期含む)



第5図 七ノ域遺跡第10地点第4面全測図 (S= 1 / 800)



写真1 遺跡遠景（空撮・北西から）



写真2 1区全景（東から）



写真3 2・4区全景（空撮・右が2区）



写真4 3区全景（東から）



写真5 6区全景（東から）



写真6 近世畝状遺構全景（東から）



写真7 円形土坑群全景（南東から）



写真8 H12号住居址全景（西から）



写真9 H24号住居址遺物出土状況（北から）



写真10 H1号井戸土層断面（北から）



写真11 H3号井戸遺物出土状況（南西から）



写真12 H4号掘立柱建物址全景（北から）



写真13 H14号溝全景（南東から）

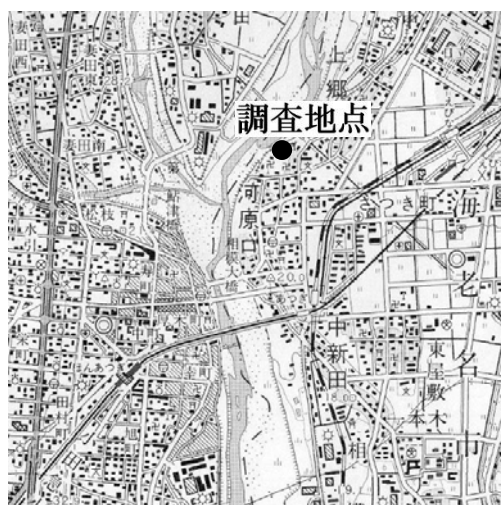
弥生時代から現代まで連綿と続く相模川の自然堤防上の遺跡

かわらぐちぼうじゅう

河原口坊中遺跡第8次調査

所在地 海老名市河原口三丁目35-4外
調査期間 令和元年12月16日～令和2年9月30日（予定）
調査面積 1区478㎡ 2区167㎡ 計645㎡
調査組織 (株)アーク・フィールドワークシステム
担当者 市川正史・高杉博章
調査概要 神奈川県厚木土木事務所による相模川河川改修に伴う調査で、遺跡は相模川と中津川・小鮎川の三川が合流する付近の左岸、自然堤防上に立地しています。

今回の調査地点は遺跡の北端にあり、隣接する第5次及び第6次調査地点を挟んで西側を1区、東側を2区と呼称することとしました。



第1図 遺跡位置図(1/50,000)

【1区】

近世 畝状遺構3条、竪穴状遺構1基が確認されただけで、当時調査区一帯は畑作地であったことがうかがえます。

中世 溝状遺構7条、土坑2基、ピット19基が確認されました。C1号溝状遺構は第5・6次調査区及び2区で見つかった溝状遺構に連続するもので、有力者の屋敷を囲う方形区画溝と思われます。C3号溝状遺構はその外側を約1.5m離れて並行して走っており、二重堀であった可能性も考えられます。

古墳時代～平安時代 竪穴建物跡41棟、溝状遺構2条、土坑6基、ピット14基、竪穴状遺構2基、焼土址群1箇所が確認されました。竪穴建物跡は古墳時代後期～奈良時代が主体で、一辺が5mを超える大形の建物跡が5～6棟あります。竈は西壁に設けられ、煙道部がトンネル状に長く掘られているのが一般的です。H1号溝状遺構は、C1号溝状遺構に西半を切られており、その前身の遺構と考えています。ピットの中には、大形で、底面に根固め痕が残る掘立柱建物跡の柱穴がいくつか見つかっていますが、調査区の西端に集中しているため、詳細は不明です。出土遺物は土師器・須恵器のほか、鉄製品(刀子・釘)・石製品(石製模造品・白玉・紡錘車)・土製品(紡錘車・土錘・土玉)などがあります。

弥生時代 方形周溝墓は第6次調査から連続する2基のほか、調査区内に全形を残すものなど計9基が確認されています。一辺が9m前後で、四隅が切れるものと全周するものがあります。

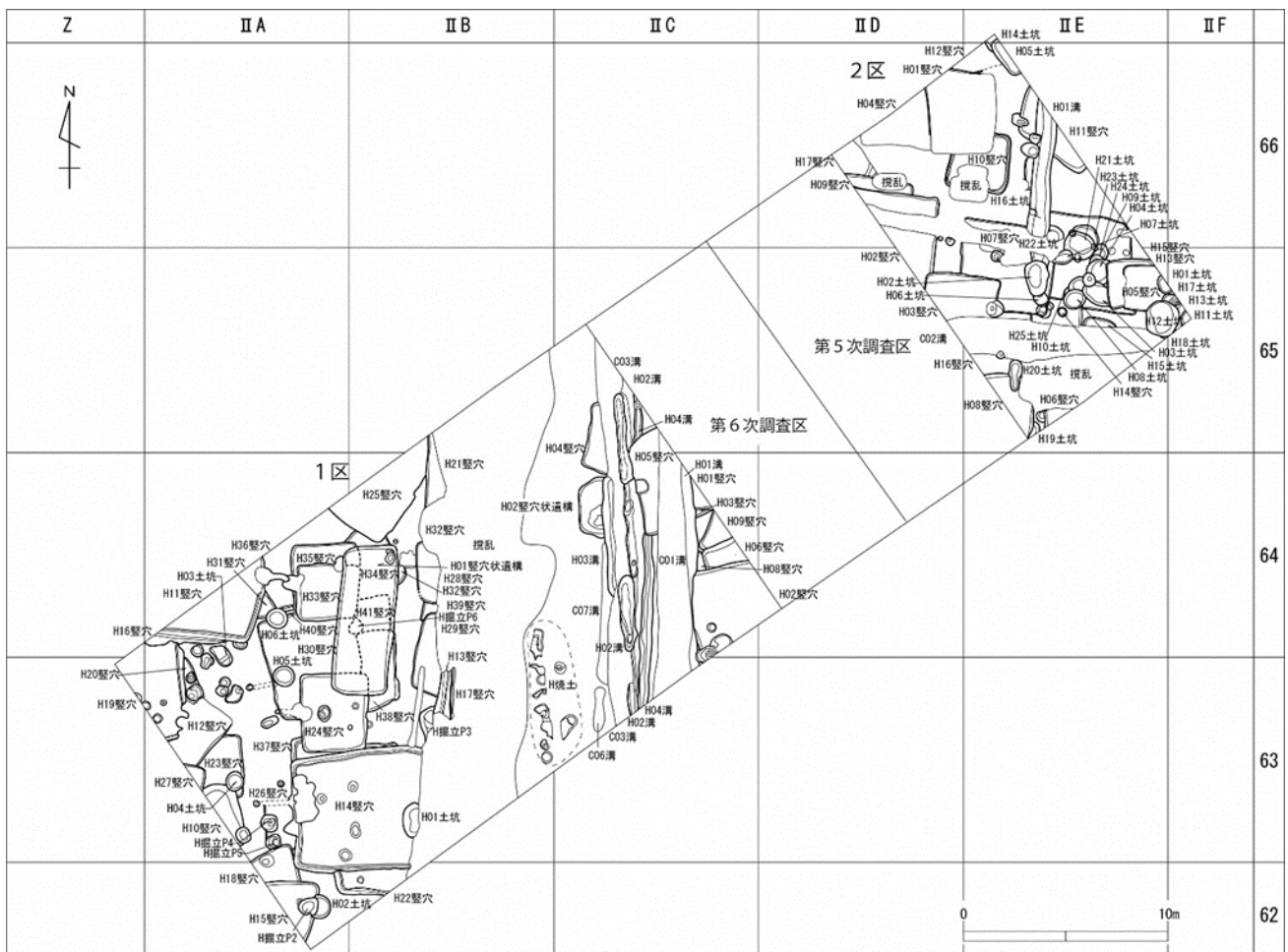
【2区】

中世 ほぼ東一西方向に走る溝状遺構2条、土坑5基、ピット19基が確認されました。溝状遺構は西側に隣接する第5次調査区で見つかったものに連続しています。南側のC2号溝状遺構の中位からは石鉢が出土しました。

古墳時代～平安時代 竪穴建物跡 20 棟、溝状遺構 2 条、土坑 25 基、ピット 19 基が確認されました。竪穴建物跡は古墳時代後期を主体としていますが、この時代の建物に一般的に造り付けられる竈は一つも見つかっていません。出土遺物は土師器が主体で、須恵器のほか小型特殊土器・土製品（瓦）・石製品（砥石・白玉）がごく少量出土しています。

弥生時代 方形周溝墓 1 基、土坑 1 基が確認されました。方形周溝墓は第 5 次調査区で見つかったものに連続していますが、伴う遺物は出土していません。

まとめ 本遺跡の北端に位置する調査区一帯では、弥生時代に墓域として利用が開始され、古墳時代後期～奈良・平安時代には集落として栄えました。中世になると方形区画溝に囲まれた居館跡（もしくは寺院跡か）が営まれ、近世には耕作地となり、現代の景観に引き継がれてきたと言えましょう。（市川正史）



第 1 図 古墳時代後期～奈良・平安時代遺構全体図(約 1/400)



写真1 調査区遠景(南から)



写真2 調査区空撮 1区:古墳~奈良・平安時代、2区:弥生時代全景(上方北西)



写真3 1区C1(右)・3号溝状遺構(南から)



写真4 1区H24 竈(東から)



写真5 1区H24 竈(東から)



写真6 1区出土石製模造品(勾玉・有孔円板)、
白玉、石製・土製紡錘車、土玉



写真7 2区中世面全景(北西から)



写真8 2区C2号溝状遺構出土石鉢



写真9 2区古墳～奈良・平安時代全景(北西から)



写真10 2区Y1号方形周溝墓(北から)

